

## 誤字とユーモア

林 幸子

## Misspelling and Humor

Sachiko Hayashi

## 要旨

携帯電話、インターネットの普及に伴い、英文メールにおいて“text message short-hand”, “internet slang”等と呼ばれる省略文字、絵文字が多用されている。しかしながらbe4(before)に代表されるこうした非標準綴りは、実は19世紀半ばのアメリカで“literary comedian”と呼ばれていたユーモリストたちによっても多用されていた。彼らは、アメリカ全土で講演活動を行い講演家として人気を博し、さらには登場人物の発した音をそのまま非標準綴りを用いて文字化した数々の短編を世に送り出した。その非標準綴り“phonetic misspelling”は、登場人物の個性を印象付けただけでなく、権威を風刺する視覚的ユーモア、文字から聞こえてくるような音のユーモアを生み出していった。彼らの人気の高まりは、合理的な綴りを追求した「綴り簡素化運動」にまでつながり、ひいてはMark Twainの「語りによるユーモア」を生み出す礎を築くことになったのである。

キーワード：ユーモア、誤字、マーク・トウェイン、文学的コメディアン

Key words : humor, misspelling, Mark Twain, literary comedian

## 1. はじめに

数年前のことだが、ロンドンの13歳の生徒が教師に提出した夏休みのレポートがDaily Telegraphで話題呼んだ。CNN.com (Mar. 3, 2003)によると、そのレポートの英文は、“My smmr hols wr CWOT. B4, we used 2go2 NY 2C my bro, his GF & thr 3 :- kids FTF. ILNY, it's a gr8 plc.”となっている。当惑した教師はまるで象形文字のようだと言っていたという。これは“text message short-hand”, “text message language”, “internet slang”等と呼ばれる省略文字を多用して書いた英文で、本来なら、“My summer holidays were a complete waste of time. Before, we used to go to New York to see my brother, his girlfriend and their three screaming kids face to face. I love New York. It's a great place.”となるべき文である。E-mailと携帯

電話でのメールの爆発的普及により、文の簡略化のためか、英語圏のみならず、日本においても上記のような省略文字の多用は現代若者文化、サブカルチャーの中ではかなり一般化した現象であり、事例は数限りない。

しかしこうした略語あるいは象形語は、ネット文化が生まれるはるか昔にも見られた現象であった。19世紀半ばに活躍したアメリカのユーモリストCharles Farrar Browneの短編“Women's Rights”の一部を引用してみる。

I pitcht my tent in small town in Injianny one day last seeson, & while I was standin at the dore takin money, a depptyashun of ladies came up & sed they wos members of the Bunkumville Female Moral Reformin & Wimin's Rite's Associashun, and thay axed me if they cood go in without payin.

“Not exactly,” sez I, “but you can pay without goin in.”…“We air, Sir” said the feroshus woman--“we belong to a society whitch beleeves wimin has rites…we will resist henso4th & forever the proud men.”  
“My female frends,” sed I, “be4 you leeve, I’ve a few remarks…”<sup>1)</sup>

権威を振りかざして、ただで見世物小屋に入ろうとする女権運動家を、見世物小屋の主人が「払わずに見ることはお断りだが、見ずに払うことは一向に構わないよ。」とユーモアたっぷりに追い払う話である。主人の言葉の小気味よさが魅力の短編であるが、読者にとって最も印象的なのはbe4, henso4th等現代の省略文字を想起させる語、さらに誤字脱字と見受けられる妙な非標準綴りの頻出ではないだろうか。引用文中より非標準綴りを取り出してみるとその数は約100語中27語に及ぶ（カッコ内は正しい綴り）。

Injianny (Indiana), seeson (season), standin (standing), dore (door), takin (taking), depptyashun (deputation), sed (said), wos (were), reformin (reforming), wimin (women), rite (right), associashun (association), thay (they), ax (ask), cood (could), payin (paying), sez (says), goin (going), air (are), feroshus (ferocious), whitch (which), beleeves (believes), henso4th (henceforth), frends (friends), be4 (before), leeve (leave)

もちろんこれらの非標準綴りは作者がうっかりと間違えたものではなく、また携帯もPCも無縁の時代であるのでそのための省略文字でもない。さらにはこうした文字の多用はBrowne一人に見られる現象ではなく、19世紀半ばのアメリカで多くのユーモリストたちが利用していた。では一体何のために彼らはあえてこうした非標準綴りを多用したのだろうか。それは彼らのユーモアとどのような結びつきを持っていたのだろうか。そしてユーモリストたちの頂点に立つMark Twainの作品にはいかに反映していたのであろうか。本論では、ユーモアとの結びつきを軸に、19世紀アメリカのユーモリストたちの非標準な綴りの意義、意味を考察する。

2. 本 論

1) 非標準綴りの使用者たち

19世紀のアメリカの文学の世界には、Emerson, Poe, Thoreau, Hawthorne等を中心とするアメリカン・ルネサンスの本流のもとに、ユーモアという全く異なった潮流が渦巻いていた。フロンティアラインがカリフォルニアまで達し、さらにゴールドラッシュという歓喜も重なって、カリフォルニアを中心に陽気な雰囲気が増え、様々な盛衰、失敗、失望はあったものの、喜劇的なもの、楽しいものへの関心が高まり、新興の町や金鉱採掘キャンプを中心に、無名のユーモア作家が次々と誕生していった。彼らは地方をめぐるユーモラスな講演活動を盛んに行い、タキシード姿の講演者が身振り手振りを交え愉快な話を繰り広げる様子は、知的娯楽ショーとして人気をさらった。半年で100回以上の講演をこなし、何万ドルもの講演料を稼いだ者もいたという。さらに各地で生まれたpenny pressと呼ばれる地方小新聞に、ユーモリストたちはユーモアあふれる記事や短編を連載し、個性豊かな主人公を生み出していった。人気を博した主人公たちの名前については作者と同一視され、作者の名前を凌駕して講演者名、作者名として一人歩きするまでになってゆく。代表的なユーモリスト、彼らの生み出した主人公の名前を挙げておこう。

表1 19世紀アメリカのユーモリスト

ユーモリスト	生没年	作品中の主人公
Seba Smith	1792-1868	Jack Downing
William Tappen Thompson	1812-1882	Major Jones
George Washington Harris	1814-1869	Sut Lovingood
Johnson Jones Hooper	1815-1862	Simon Suggs
Henry Wheeler Shaw	1818-1885	Josh Billings
Charles Henry Smith	1826-1903	Bill Arp
David Ross Locke	1833-1888	Petroleum V. Nasby
Charles Farrar Browne	1834-1867	Artemus Ward

19世紀アメリカで活躍したユーモリスト名と作品中の主人公名

彼らの人気はアメリカ国内に留まらず、BrowneいやWardは、ロンドンにまで講演旅行に出かけるほどにまでなった。ついにはリンカーン大統領に重用されるほどの彼らの人気ぶりを、批評家Weberはやや大仰に評価している。

Emerson, Whitman, Longfellow, Holmes,

Lowell, Whittier, Hawthorne, and other important contemporaries of Ward had already published some of their major writings by 1860. Nevertheless, it was Ward, rather than any of these men, who was read enthusiastically from the Atlantic to the Pacific, who attracted large audience in a western village or an Eastern city when he appeared on the lecture platform<sup>2)</sup>.

表1に挙げたユーモリストのほとんどが、先に見た非標準綴りを多用しているが、中でもとりわけ目立って用いているのが、Shaw, Locke, Browneら、19世紀後半に活躍したliterally comedian (文学的コメディアン)と呼ばれるユーモリストたちである。そこで3者の作品を一つずつ取り上げ、そこに見られる非標準綴りの傾向を確かめてみることにする。なるべく短い作品という基準でShawの“Live Yankees”, Lockeの“Letters of Petroleum V. Nasby”, Browneの“Woman’s Rights”を利用する。“Woman’s Rights”は冒頭で引用済みであるので、他の2作品の一部を引用する(下線部は非標準綴り)。

“Live Yankees”;

Live Yankees are chuck full of karakter and sisning hot with enterprize and curiosty. In bild we find them az lean az a hunter’s dorg, with a parched countenance, reddy for a grin, or for a sorrow; ov elaastick step; thortful, but not abstrakted; pashunt, bekauze cunni; ever watchful; slo to anger; avoiding a fight; but resolute at bay.<sup>3)</sup>

“Letters of Petroleum V. Nasby”

I see in the papers last nite that the Government hez institooted a draft, and that in a few weeks sum hundreds uv thousands uv peeceable citizens will be dragged to the tented field. I know not wat uthers may do, but ez for me, I cant go. I found it wood be wus nor madnis for me to undertake a campane, to wit: <sup>4)</sup>

内容について触れておくと、前者では、外国旅行に出かけても、美しい風景に感動するどころか、ピラミッド

の値踏みをするヤンキーの物質主義が滑稽に皮肉られている。後者では、志願兵募集の際に、参加したいのはやまやまだが、体調が悪くて断念するという言い訳が面白おかしく描かれている(言い訳とは、はげ頭でかつらが必要、ふけ症で迷惑をかけるなど)。作品の長さは“Woman’s Rights”が600語、“Live Yankees”が700語、“Letters of Petroleum V. Nasby”が360語と、非常に短い、それぞれおよそ120語、100語、60語の非標準綴りを含んでいる。テーマが異なるため用語にある程度の相違はあるが、非標準綴りの割合の多さには唖然とする。この妙な綴りに対し、Blairは“cacography”、Weberは“misspelling”<sup>5)</sup>という綴り違い、誤字を意味する呼び名を使用している。さらにbad spelling, phonetic dialect, eye dialect等の表記もされている。

“dialect”であるなら、これらの非標準綴りは方言、俗語辞典の類に記載されているであろうか。先に挙げたBrowneの引用部分に含まれる非標準綴りのうち、standi, payin等5語は語尾のgが脱落した極一般的な方言形態であるため除いて考え、残る22語について19世紀の語彙の記載が多い5種の辞典——A Dictionary of Americanisms (M. M. Mathews, 1951), American Dialect Dictionary (Harold Wentworth, 1944), Dictionary of American Slang (Harold Wentworth, 1967), English Dialect Dictionary (Joseph Wright, 1970), Webster’s Third New International Dictionary (G & C Merriam Co, 1976), 『アメリカ文学方言辞典』(オセアニア出版、1984)——での記載の有無を調べてみた。記載があったのはax (askが音位転換した俗語)、sed, wimin, frend (eye dialect: 日常的な標準語をその標準発音に合わせて、音声表記が目の綴り字で書き表した語)の4語のみである。結局これらの非標準綴りの多くが、特定の地域方言やある文化を象徴する俗語ではなく、登場人物の発した音を、標準綴りを無視してごく自然な綴りで表現した結果なのである。いわば発音と綴りを一致させようという試みだったのだ。

発せられた音と綴りを一致させるという視点から、標準の綴りがどのように非標準に変化したか、上記の3人のユーモリストの短編に見られる代表例を利用して分類してみる。

表2からわかるように、これらの非標準な綴りは、登場人物が発した言葉の音を、標準的な綴りにとらわれず、実際に聞えたとおりの忠実に文字に再現しようとした結果なのである。ユーモリストたちにとって、[e]の発音には、a, ay等の綴りよりeの方が合理的であり、[rait]という発音を表わす語にはghは不要であり、さらに[z]の音を表

表2 音による綴りの変化

発音記号	綴りの変化		実例	
	標準	非標準	標準	非標準
<b>ʌ</b>	o	u	another done some other one	anuther dun sum uther wun
<b>ɪ</b>	o/e	i	women	wimin
<b>i:</b>	ea ie	ee	beast believe leave peace season	beest beleev leeve peece seeson
<b>e</b>	a ai ay ea ie	e	any said says head friend	eny sed sez hed frend
<b>u/u:</b>	oul u	oo	could would June	cood wood Joon
<b>ou</b>	oa ow	o	boat slow	bote slo
<b>k</b>	c	k	because character collar cotton	bekauze karakter kollor kotton
<b>v</b>	f	v	of	uv / ov
<b>z</b>	s	z	as desire has his is	az dezire haz hiz iz
<b>発音なし</b>	gh	—	night right thoughtful	nite rite thortful
<b>fɔ:r</b>	fore / for	4	before henceforth	be4 henso4th

発音に合わせて標準綴りがどのように非標準綴りになったかを示す

記するための綴りは、s でなく z でなければならなかったのだ。本論では、これらの非標準綴りに対し、音を意識したために故意に作られた誤字である（dialectではない）という点から、“phonetic misspelling”という呼称を用いたいと思う。

## 2) phonetic misspellingの意味

phonetic misspellingの使用者達がユーモリストであるということを考えると、これらの誤字には思いのほか多くの意味があり、威力が備わっていたように思える。

第一に、視覚的ユーモアの源となっている。初めてユ

ーモリストたちの作品を目にしたとき、読者は目に映る綴りそのものに、単純に面白い、奇妙だという強烈な印象を受けるはずである。特にBrowneが用いた“be4”, “henso4th”(他作品にはthere4もみられる)という数字を含んだ綴りは、Blairの表現を借りるなら、まさに「言葉のアクロバット」(引用3)であり、実験的なショーのように当時の読者の目を引き付けたに違いない。そして現在でも目に直接訴える視覚的効果は失せていない。

ただし、19世紀ユーモリストたちの作品は、目に焼き付けただけでなく、実際の発音を想起させる綴りの力で耳にも強い響きを残している。彼らの活動の中心は講演

であり、そこでの語りの面白さ、魅力が人気の源であった。その語り口調をそのまま文字化した、あるいはしようとした結果生まれた作品の中にも、登場人物の生の声が感じられ、いわば講演者と聴衆の一体感とでも呼べるものが、書かれた作品を通して可能になったのである。徹底した発話音の文字化、それらの紙上での再現は、ユーモリストたちにとってはリアリズム追求の1つのアプローチであったと言える。

実際に、読者の目と耳へのアピールは非常に効果的だった様で、Josh Billingsの短編“Essay on the mule”は、標準綴りで発表された時には注目を浴びなかったが、phonetic misspellingを用いて、“Essa on the Muel”と題を変えて出版したところ瞬く間に初版が売り切れたという。<sup>6)</sup>

さらに、phonetic misspellingの多用は、その使用者（発話者）が、非標準の言葉話すこと、あるいは無教養であることをほめかすことにもなり、結果として、作者は自分のマスクとして、また分身としての主人公の創造に成功した。“fool character”と呼ばれる作品中の主人公たちは、本からの学問とは無縁で笑われる存在ではあるが、形式的で権威を押し付けるものには敢然と立ち向かう大衆の一員として、読者にとって身近な存在となった。それがBrowneの生んだArtemus Wardであり、LockeのPetroleum Nasbyであり、ShawのJosh Billingsなのである。そしてついには作者自身がfool characterである主人公と同一視され、無教養だが権威を皮肉るパフォーマーとして大人気を得るに至る。Shawは髪を振り乱すBillingsとして、Lockeは揺椅子に揺られながら悪態をつくNasbyとして、Browneは見世物小屋の主人Wardとして、読者に受け入れられていった。作者自身も、演壇に立つときは自分が生み出した主人公になりきって、いわばそのマスクを着けて、腕を振り上げ、髪を振り乱し、主人公を演じた。

しかし実際の作者たちは、決して無教養な人物であったわけではない。Browneは判事の息子として生まれ、Lockeは市会議員を務め、Shawは大学教育も受けている。何よりもジャーナリストとして働くうちに標準英語や書き言葉に十分に習熟していたはずである。むしろ教養人の部類に入る彼らは、無教養な人物になりすますための工夫としてphonetic misspellingを多用したのである。作者と主人公が同一視される錯覚、ないしは作者のパーソナリティーの二面性こそが、彼らの娯楽的ユーモアの根源となっていたのである。phonetic misspellingの多用は、19世紀のユーモリストの中でも特にliterary comedianに顕著にみられる特徴であり、彼ら以前の他

のユーモリストと一線を画し、より強烈な主人公の創造を可能にした秘策でもあった。

権力に対する風刺という観点からみると、権力者側の人物のことばまでもがphonetic misspellingで表記されていることには別な意義がうかがえる。例えば、Browneの描く世界では、王も女王も大統領も、そしてfool characterも、語りはみな同様なphonetic misspellingで表わされている。つまり結果として権力者側の権威が引きずり降ろされていることになるのである。王子ナポレオンもその犠牲者の一人である。次の引用は“Interview with Napoleon”と題された短編の一部である。

“Since you air so solicitous about France and the Emperor, may I ask you how your own country is getting along?” sed Jerome, in a pleasant voice.

“It’s mixed,” I sed, “But I think we shall cum out all right.”

“Columbus, when he diskivered this magnificent continent, could hay had no idee of the grandeur it would one day assoom,” sed the Prints”<sup>7)</sup> (下線部はphonetic misspelling) .

ここでは3人の登場人物の語りがすべてphonetic misspellingで表わされており、それが結果としてナポレオン王子の権威をWard(Browne)と同じラインにまで引き下げているのである。あくまでも発音を文字の外見に写し取ろうとするphonetic misspellingの試みは、単なるふざけや遊びの領域を超えて、ユーモアの本質にまで介入する力を秘めていたのである。

### 3) Mark Twainとphonetic misspelling

本名をSamuel Langhorne ClemensというMark Twainは、1835年ミズーリー州の寒村フロリダで生まれた。12歳で学校教育と縁を切ると、“Jumping Frog”(1865)の短編で世に知られるようになるまで、植字工、新聞の通信員、水先案内人、雑誌記者という具合に様々な生活体験をした。兄と共に大陸を横断し、金鉱探しをしたこともある。ジャーナリズムの世界に入ってから、面白おかしい話の講演活動を盛んにおこない、その面ではBrowneやLockeの後輩であった。“Jumping Frog”がBrowneの推薦で出版された経緯を考えあわせると、文学の流れの中でTwainをBrowneらliterary comedianの

後を継ぐものと位置づけることは妥当であろう。

綴りの面からも、TwainがBrowneらのphonetic misspellingを踏襲していたことが分かる文章がある。Mark Twainというペンネームが定まる前Thomas Jefferson Soleという署名で新聞に載せた大変面白い手紙文の一部である。

#### Learning Grammar

Mr. Editor, --I have been sendin' my dater Nancy to a schoolmaster in this naborhood. Last Friday I went over to the school just to see how Nancy was getting' along, and I sees things I didn't like by no means. This schoolmaster was larnin' her things entirely out of the line of eddycation and heered one class say their lesson. They was a spellen, and I thot spelled quite exceedingly. Then cum Nancy's turn to say her lesson—She said it very spry. I was shot! And dermined she should leave that school. I have heered that grammer was an uncommon fine stuyddy, but I don't want any more grammer about my house. The lesson that Nancy sed was nothin' but fookisheset kind uv talk, the ridiclessluy talk you ever seed. She got up and the first word she sed was

I love!

I looked rite at her hard for doing so improper but she went rite on and sed,

Thou lovest,

He loves,

And I reckon you never heard such a riggamyrole in your life—love, love, love, and nothing but love. She said one time;

I did love

Sez I, “Who did you love? Then the schlars laffed, but I wosn't to be put off, and I sed, “who did you love, Nancy? I want to know—did you love? The schoolmaster, Mr. McQuillister, put in and said he would explane when Nancy finished the lesson. This sorter pacified me and Nancy went on with awful love talk. It got wus and wus every word.

I might , could, or would love

I stopped her again and I reckon I would see about that, and told her to walk out of that house. The schoolmaster tried to interfere, but I wouldn't let him say a word. He sed I was a fool and I nockt him down and make him holler in short order<sup>8)</sup>.

1856年1月に、イリノイ州の地方紙Express Journal of the Peopleに載せられたもので、デビュー作“The Dandy Frightening the Squatter”(1852) 発表後4年目の、Twainとしては最も初期のころの作品である。一見してわかるようにdater(daughter), naborhood (neighborhood), thot(thought), cum(come)を始めとして多数のphonetic misspellingが全編に散りばめられている。Sed(said), uv(of)等Browneらが使用していた綴りと同じものもかなり見られる。

さらに内容を考えてゆくと、この小品が19世紀後半に見られたphonetic misspellingを利用したユーモアの典型であることが分かる。娘の勉強ぶりを見学に出かけた語り手Soleは、“I love, he loves”と動詞の人称変化ばかりを単調に繰り返す文法の授業に疑問を持つ。一体何を愛しているのかと娘を問い詰め、動詞を実際に使う時には対象物が大事であると教師に食ってかかる。形式づくめで現実味に乏しい文法の授業と、誤字だらけで一見無教養に見えるSoleの文章との対比が面白い。また文法という最も形式を重んじるテーマを、phonetic misspellingという形式にとらわれない文体で風刺しているため、文法に代表される形式主義、権威主義、非現実性に対する風刺の色合いは一層鋭くなり、またユーモラスになっている。その上、作者Twainとは異なった人物である語り手Soleの、非常に碎けたリズムある語り口調が生き生きと伝わり、気の荒い現実主義者の性格付けも見事になされている。

Twain自身は、学校教育はあまり受けていないにしても、数々の生活体験、さらにはジャーナリストとしての経験を通して、当然ながら標準的な表現方法、書き言葉に対する認識は人一倍持っていたはずである。その良い例として、イギリスでのインタビューの席上で、Twainがあまりきれいな英語を話すので、インダビュアが驚いたというエピソードが残っているほどである<sup>9)</sup>。そうしてみると、この小品に見られるTwainの文体、phonetic misspellingの多用は、彼が探り当てたユーモアを伝えるための媒体だったといえよう。

### 3. おわりに

Twainにまで影響を及ぼしたphonetic misspellingを用いた文体の隆盛は、一種の社会現象として思わぬ方向に発展した。1903年、Bander Matthewsの提唱、Andrew Carnegieの資金援助のもとで、National Simplified Spelling Boardという綴りを単純化しようとする全国規模の委員会ができたのである。冗談好きのアメリカ人のことであるから、当時注目を浴びていた文体に着目して茶化した遊び、おふざけ、の要素が含まれていたことは確かであろう。しかし、発音されない語尾のeをとる、[f]音を表わす綴りphはfに変えるなど、理論的にも妥当な綴りの簡素化を目指していたようである。Twainは、William Jamesらと共に委員会のメンバーに選ばれ、綴りの簡素化、phonetic misspellingを擁護するスピーチを行っている。

I implore you to spell them in our simplified forms. Do this daily, constantly, persistently, for three months—only three months—it is all I ask. The infallible result/--victory, victory, all down the line. For by that time all eyes here come adjusted to the change and in love with it, and the present clumsy and ragged forms will be grotesque to the eye and revolting to the soul. And we shall be rid of phthisis and phthisic and pneumonia and pneumatics and diphtheria and pterodactyl, and all those other insane words<sup>10)</sup>.

スピーチの中で、Twainは簡素化された綴りの重要性を痛感したのは、“Considerations concerning the alleged subterranean holophotal extemporaneousness of the conchyliaceous superimbrication of the Ornithorhynchus, as foreshadowed by the unintelligibility of its plesiosaurian anisodactylous aspects”という驚くほど長いタイトルの文章依頼が来た時だと言っている。当時、1語7セントの契約で文を書いていたTwainにとって、文字数の多い語はできるだけ避けたかったし、同じ長さの文章を書くのならば、少しでも語数を増やして多くの収入を得ることが不可欠だった。綴り簡素化運動への賛同は、こうした現実的な問題がきっかけだったというのである。この長いタイトルはもちろん実際のものではなく、接頭語、接尾語を駆使し、文字数の多い単語

の見本としてかなりオーバーに創られてのものであろう。またスピーチ自体にも、Twain特有のほら話的要素が含まれていることも否めない。

しかしTwainの綴り簡素化に対する態度はあくまでも明確で、簡素化された文によっても感情や事実は十分伝わるものだと強調している。「古い伝統を守って従来の綴りに固執することは、家の中に癌を巣食わせているようなものだ。癌は取り除かなければならない」という言葉には<sup>11)</sup>、古いものにこだわり、新風を受け入れようとしない社会や、さらには出版界への痛烈な風刺も込められている。

Simplified spellingの運動の趣旨は、Browneらのphonetic misspellingのそれと全く同一のものではない。しかし、形式や権威に対抗し、現実的なものを追い求めようとする精神的土台は共通のものであった。その土台を受け継ぐものとして、Twainはその土台の上に、語りを生かすための方言や誤字の利用、語彙の選択などなど、言葉の持つ様々な要素を積み重ね、語り言葉の紙上再現、ひいては語りから生まれるユーモアを追い求めていくことになるのである。

### 引用文献

- 1) Browne CF. Selected Works of Artemus Ward, Albert & Charles Boni, New York 1924: 169-170
- 2) Weber B. the Misspellers, Rubin Jr. LD (Ed), The Comic Imagination in American Literature, Rutgers University Press, New Brunswick 1973: 127
- 3) Blair W. Native American Humor, Harper & Row, New York 1937: 428
- 4) Blair W. op.cit, 411
- 5) Blair W. op.cit, 122, Weber B, op.cit, 128
- 6) Kesterson DV. Literary. Comedians and the Language of Humor. Studies in American Humor, 1982; 1: 46
- 7) Browne CF. op.cit. 77
- 8) Branch EM. Did Sam Clemens Write ‘Learning Grammar’?, Studies in American Humor, 1983; 2: 201-202
- 9) Matthews B. Mark Twain and the Art of Writing, Scott Al(ed), Mark Twain: Selected Criticism, Dallas 1955; 160-161
- 10) Clemens SL. Mark Twain: Plymouth Rock and the Pilgrims and Other Salutory Platform Opinions, Neider C (ed), New York 1984; 265-266
- 11) Ibid, 269-270